第二章　回鶻人が回鶻文字を使用するに至りし時代

回鶻人が何時より所謂回鶻文字を使用するに至りしかを定むるは、極めて困難なる研究の一なりとす、從來學者の此の事に論及するものは、必ず Orkhon の第三碑として知らるゝもの、即ち同河谷の Kara Balgassun に存する回鶻可汗紀功碑を引用し、此の碑文が漢字、突厥字、回鶻字の三體にて記さるゝを以て、遲くも此の碑の建設せられたる時代には、既に回鶻文字は製作せられたるものと考へたり、即ち Thomsen[2] 氏は突厥文字と回鶻文字との交替期を論じて「突厥王國の西紀七四五年に回鶻に依りて覆へされたる後も、突厥の文字は更に新しき纎巧なる形に於て存在し、彼の回鶻時代、西紀七八四年に建設せられたりと思はるゝ Orkhon の第三碑の上にも認めらる、然も此の碑文は突厥文字を以て記さるゝ最後のものなる可く、該碑には後に亞剌比亞文字の行はるゝに至る迄盛に用ゐられたる回鶻文字の既に存するを認む」と云ひて、八世紀の末近き頃には、此の文字が漠北回鶻人の間に用ゐられたるものなるを說き、又別に回鶻語の子音の組織を論じたる論文[4]の劈頭に於て、「回鶻文字は人の知る如く Estranghélo syriaque を摹倣せるものにして、恐らくは八世紀（七六二年？）[5]に起れり」と云ひ、Schlegel[6] 氏もこゝに記したる Thomsen 氏の考に從ひて、突厥文字は第三碑に見ゆる回鶻文字即ちシリヤ文字の爲に驅逐せらるゝに至りしものなるを述べ、次で「回鶻可汗移地健（即ち牟羽可汗）は西紀七六二年に洛陽の都を奪ひ、唐の天子を助けし時、ネストル教僧侶と相識るに至り、又其の僧侶の數輩は人民を教化する爲に回鶻に伴はれしを以て、此等の僧侶がシリヤ文字を回鶻に導き、之に由りて新に其の教を奉ずるに至りし回鶻人がシリヤ語の基督教の